

「御丁寧の御挨拶痛み入つてござりまする」と禮を返した。
 それで重成は改めて家康始め義直、頼宣の兩公達、安藤本多その他
 他の老臣に暇乞ひを申し上げ、徐々と退出する、お次の間には西尾
 豊後守と、永井右京大夫とが
 詰めて居た、重成は見て、

「大切の御役目を蒙りたりと
 云ひ、内府様
 御口上も申し
 上げぬ前と
 て、最前は無
 骨の段平に御
 容赦下され候
 へ」と又丁寧
 に挨拶した。



西尾永井の二人も、重成の物に馴た仕方に感じて、相當の挨拶する、並み居る武士に一禮して、
 「最前は嚴命を蒙りて、まだ大御所様御前へも参らず、由て一禮にも及ばず、失禮の段は御宥免下さ
 れへ」と陳述した、すると伊奈筑後守がすつと出て、

「御念の入つたるお詞、却て恐縮に存じまする」と挨拶した。

重成が血判を受け取つて、御玄關へ掛るまで、これにて三度まで同じ挨拶をしたが、少しにも答禮
 したのは、この筑後守のみであつた。

郡主馬介も、始終重成と同様、後に列して役目を果たしたから、兩人は例の後藤庄三郎の案内で柵外
 へ出て、こゝに待たせたる馬に跨つて、徐々と歸り去つた、その躰の嚴重なこと、連も普通人の及ぶ
 所でない、家康は座も立たず、重成の舉動に目を注ぎ居たが、やがて左右を顧みて、

「長門守は好い武士ぢやの、聰明智發なところは下野守忠吉に酷く似て居るが、眼ざしの恐ろしき事、
 只物とは思はれぬ、秀頼には惜しい家人ぢや」

家康のこの言葉は、重成の半面をよく評して居る、眼ざしの恐ろしさは只物では無いと看破したのは、
 さすがに家康であつた、重成が家康の前に居た時の眼光、只物でなかつたのは當然である、すると藤
 堂高虎が口を添へて、

「誠に髪かみの懸かより鼻筋はなぢまで、父常陸介ちやうりくすけによく似て居りまする、上意じやういの通り武勇ぶゆうを心掛けるものと見えする」

茶白山ちやうしやうの陣中ぢんちゆう、暫時しばらくは重成しげなり賞美しょうびの詞ことばのみであつた、

重成しげなりは城中じやうちゆうへ歸つて、誓書せいしょを秀頼ひでよりにさし上げる、秀頼ひでより淀君よどぎみを始めとして、上下じやうげ一同どうからその手柄てがまを稱たへる、先に重成しげなりを卑怯者ひせつしやと罵つた茶道てうだうの宗右宗圓そうごそうえんは、何れも片隅かたぐみに小さくなつて、重成しげなりの顔かほをも見かねて居た。

(七十一)

重成しげなりは是こゝに大いおほに面目めんめくを施ほして、自分じぶんの屋敷やしきに歸る、草加市郎兵衛くさかいちろうべゑ先驅せんきよして、門前かどまへへさし掛ると、そこに乞食こじき見たやうな尼法師あまはしが佇たづんで居る、時しも夕暮ゆふぐれの事ことで、熱あつくは顔かほも分わりかねるが、迂論うろんな奴やつと見て居たから、大聲おほこゑで叫なき立てた、

「御前ごぜんのお歸りだ、穢せしい形かたちをしてそんな處ところに立て居るのは宜よろしくない、何處どこへなりとも立ち去れ」

尼法師あまはしはすつと寄つて、

「御前ごぜんと云ふのは誰たれの事ことかの」

「怪あやしからぬ廣言くわうげん、こゝを誰方たれなたのお屋敷やしきと心得る、勿なれなくも當城あたじやうの四天王しやんとわう、木村長門守きむらなげんしゆう様の……」

「それは知つて居る、お前まへが御前ごぜんといふ、その人を誰たれぢやといふのぢや」

「御當家ごたうけで御前ごぜんといへば、云いふまでもない長門守なげんしゆう様の事ことよ、詰つらん事を聞きかんで早く去れ、お目障めさげりになつてはならぬ」

尼法師あまはしは斯かくいふ市郎兵衛いちろうべゑの顔かほをつくく見て

「あゝ、お前まへは市郎兵衛いちろうべゑぢやないか」

乞食こじき見たやうな尼法師あまはしに名なを呼よびられて、市郎兵衛いちろうべゑは喫驚ひつくりした、

「ずけくと怪あやしからぬ、全跡ぜんせきおぬしは何者なにものだ」

「お前まへ、私の顔かほを見忘わすれたかいの、私わしぢや右京太夫局うきやうたふぶくろの成なの果はぢや」

右京太夫局うきやうたふぶくろは重成しげなりの生母なまはは、世よに亡なき常陸介ちやうりくすけの妻めかけである、市郎兵衛いちろうべゑは愈いよ驚おどろいて、

「あゝ、あなた様さまが……」

「右京太夫局うきやうたふぶくろが成なの果はぢや、今木村長門守いまきむらなげんしゆう重成しげなりとて持もて囃はさるゝ大將だいしやうが、私わしの生なみ落おした春雄はるおとの事ことと聞きいては居たが、見ぬ間まは信まこととも思おもはれて、どれほど心を費つしたかも知れぬ、然しかしお前まへが先驅せんきよをして居る事ことを見ると、矢張り倅せがれに相違さうゐ無い、もう是これへ歸かるか、算かぞへて見ると十三四年じゅうさんしやうねん目に再會さいかいする、さぞ立派りつぱになつたであらうの」

「是はお局様でござりましたか、多年お側に事へた身が、いかに年を老りたりとて、お見忘れ申す法は無い、先刻よりの無禮、眞平御免下さりませ」と、市郎兵衛は大地に両手を突くばかりであつた。そこへ長門守も立ち歸る、市郎兵衛から此の尼法師が、日頃念頭に縋つて居た母親であると聞いた時は、嬉しさと悲しさとに胸が一杯になつた、馬からひらりと飛び降りて、

「母上、お懐しうござりまする」と、手を取つて泣き出した。
「お、春雄か、さて、立派に成人したの、お主の顔を見るにつけて、常陸介様の御事が思ひ出される、髪懸の様子から目許口許父子とて斯うも似るものか、私は我が子と我が良人とに逢ふたやうな心がする」と、是も感極まつて泣き出した。

然しこんな處に何時までも立話しは出来ぬといふので、市郎兵衛は介抱して右京太夫局を奥へ通す、重成が衣服を更める間に、妻のお菊が立ち出て、挨拶する、今日ばかりは此の屋敷に春の氣が充ち充ちて見えた。

(七十二)

その中に長門守は衣服を更めて對面する、右京太夫局は長の旅行、着る物も穢れて居るから、重成は新しい自分の召料を取り出して着かへさせる、五歳の時に別れたばかりで、十五年が長の間、一度

の便りもせなんだ母子が、こゝに圖らず邂逅たのであるから、其喜悅は譬ふるに物も無い、重成は嬉し涙にくれて、

「長の月日を何處でも過し遊ばしました」と訊ねた、すると局は目を拭つて、

「諸國遍歴を致いたよ、凡そ日本六十餘州足跡を附けぬ所も無く經て参つた、國々村々の神社佛閣へは、主家繁昌、國土安穩、我家再興の祈禱を上げた後、そなたの無事を祈らぬ處もなかつた、佐々木義郷殿は義に厚く情ある御方、事情を物語りてそなたをお預け申したるなれば、いかやうにも爲るであらうと思ひつれど、さて女心の頼母しげも無う、兎もすれば氣に罹りて、急に逢ひたうなりしは一年の夏であつた、さうぢや櫻の花も散つて、杜鵑血に鳴く五月の半旬、折柄旅して居た奥州白川を後にして、六百里の道程を雨に打たれ、風に吹かれ、江州へ着いたのは最早秋の暮であつた、直にも義郷殿をお訪ね申さうと思ふたが、いや、未練な事して笑はれては、私ばかりの耻で無い、そなたまで累ひを及ぼしてはなるまいと心を取り直して、江州は臍目も觸らず通りぬけ、京へ上つて妙心寺へ参詣、恰どそれが重滋院殿(常陸介をさして云ふ)十七回忌に當つて居たれば、七七日が間御墓に籠りて、看經は私の役、翌る年は丹波丹後路の靈場参拜、高野へ上つて秀次様の御靈にもお事へ申した、されどその中もそなたの事……」



云ひかけて口曇つた、更に改めて、
 「忘れ難ねて又此方へ参る中、大佛殿御建立の事も聞く、鐘の銘の間違ひから、關東將軍のお怒りなされた事も聞く、その間に木村長門守重成の名がちら／＼入る、木村長門守とは聞いた事も無き武將ぞや、殊には重成とある重の字に意味がありげな、萬々一佐々木殿にお預け申した春雄の事ではなにか、假しそれであらずとも、重滋院殿に由緒の者かとも思はれて樂しう下向致す中、圖らずも今度の戦争、往來も止りて行くにも行かれず、去る處に逗留した、其の間の心苦しき、是れは口にも云はれぬ、處が今度和睦成りて誓ひのお取り交せ、近々大御所様御陣營をお取り拂ひと聞く嬉しさ、早速参つて取り敢へず生玉の御社へ御参詣の歸り途、不圖見かけたそなたの馬上姿、御紋は佐々木殿御定紋の四ツ目、手綱取つて悠々と跨つたる姿、常陸介様の御姿に生寫し、もしやと思ひて、供の衆に問ひ正せば、當時城中の花と呼ばれて、上様の御覺えめてたき木村長門守殿と聞き、さては疑ひも無き我が子、親は無くとも子は育つとは善く云ふた、佐々木殿に一言の御禮も申さず、對面するは義に於いて濟まじけれど、是れは是非なし、兎も角も門前に待ち受け、餘所ながら顔を見んと思ふたが、市郎兵衛に物云ひかけて此の始末、佐々木殿御恩とは云ひながら、善うも立派に成人して呉れやつたの、今福口の初陣、今日のお使者の手柄談も、人の噂に聞いた、草葉の蔭の父もさぞお歡び、私は明

日が日、目を瞑つても恨みとは存ぜぬ」
 重成も佐々木家に居た時の事から、秀頼に奉公した顛末までも物語る、その中に酒の用意、その夜は母子夫婦水入らずで、更深くるまで語り續けた。

(七十三)

兎角するほどにその年も暮れて、元和元年の春は來た、さしにも結ばれた兩家の確執もこゝに全く平定したといふので、正月、勿々大阪城中から、大野修理太夫と織田有樂とが茶臼山の陣所へ行つた、それは親しく家康に逢つて、秀頼の口上をも述べ、自分の挨拶をも述べやう爲てあつた。そこで本多佐渡守の手を経て、呉服三重と御肴一折とをさし上げる、最初はあ次の間で、藤堂高虎が相手になつて、四方八方の話をして居たが、暫くあつて御目見得仰せ付けられたから、二人は一方ならず面目を施した、

家康は修理太夫の顔をつく／＼見させて、

「修理、お身はまだ若いやうな、當年何歳に相成るの」

「三十二歳に相成ります」

「まだ若い、私の年を半分にしても足らぬ、さて／＼秀頼殿は好い家來を持たれてお仕合せぢや、此

の度の儀、孫の婿と云ひ若年の秀頼と確執に及んだのは、世の外聞旁々心苦しう思ふて居たに、早速和睦調ふて此の上の歡びは無い、是といふも身が骨折であつたさうな、家康過分に存するぞ」と以ての外御説であつた、修理太夫は益々面目身に餘つて、

「涯さち詞、只々恐縮の外ござりませぬ」

家康は側に居た佐渡守を見返つて、

「人は見かけに由らぬ者ぢやの、大野修理といふ名ばかりを聞いて、弱輩者のやうに思ふて居たが、此の度の儀には籠城の張本人となつて弓矢の名を揚げ、和睦の事に就いて内府殿へ忠勤を勵む事、家來たる身の道を盡して居る、立派な者ぢや、健氣な者ぢや、武士の心掛けは斯うなくてはならぬ」

佐渡守は煙に巻かれて、

「誠に懐しい儀でござりまする」と申し上げる、

「お身も將軍家へ奉公するには、修理の如く忠義でなくてはならぬぞ」と、家康は斯う云つて

「修理、お身の着して居るその肩衣を佐渡守に取らせてたもれ」

修理太夫も煙に巻かれて返答しかねて居る、家康は重ねて、

「佐渡、お身は修理の肩衣を所望して、それを着用、修理の忠節にあやかるやう致せ、修理、私の頼

みを聞いてたもらぬか」

修理太夫は大いに驚いて、

「是れは存外の御沙汰、私如き者が何としてかやうな……」

「辭退には及ばぬ、家康が所望する」と、家康自ら修理太夫の肩衣を取つて、佐渡守へ渡された、修理太夫は冥加至極の至り、申し上げる詞もなく恐れ入つて頭を下げた。

此間有樂は得意の茶を立て、諸有司へ懇親を結んで居る、誠に太平の有様であつた、然しこれは眞の表面、家康の心の裏面には、いかなる修羅が作られて居たかも知れぬ。

その日は無事に済んで、翌日は兩將軍共京都へ歸つた、すると間もなく和睦條件の第一たる大阪城外壕へ破却の事に着手した、けれど修理も有樂も家康の手の中へ籠絡されて居るから、こんな大事にも格別の注意も拂はなんだ。

(七十四)

大阪城外壕へ破却の人数は、將軍秀忠の命として、諸國の大名へ割り當てられた、その比例は斯うであつた。

高一萬石以上三萬石までが二十人、三萬石以上五萬石までが五十人、七萬石以上十萬石までが百人、

十萬石以上十五萬石までが二百人、十五萬石以上二十萬石までが四百人、二十萬石以上二十五萬石までが八百人、二十五萬石以上三十萬石までが千五百人、三十萬石以上四十萬石までが三千人、この積りを以て五十萬石以上も人数をさしたから總員は非常な者であつた、そこで輕い自分の者は役夫となり、部將であるものは奉行小頭となり、本多佐渡守は總奉行で塹壕を司り、松平忠明と本多上野介（佐渡守の子）とは城廓の破却を司つて、最も迅速に工を竣るやうとの御沙汰、更に佐渡守を膝下へ招きて、密に内命を傳へられた事は「誓約の文言は總構へといふのであつたが、二の丸三の丸をも破却すること勿論たるべく、塹壕は淺く埋め立て、三歳の子供も上り下りの出来るほどにせよ」であつた。

佐渡守は謹んで仰せを承はつて、數萬人の工夫を下知し、追々打撃に着手した、けれど城中の人々は覺悟の上であるから驚かぬ、約束通り西南の外壕ぐらゐを、破却されるばかりであらうと思つて居ると、どうして數日の中に内壕の埋立に取り掛つたから、城中では始めて喫驚して色を失つた。斯ういふ事に立ち至つたのは、全く大野修理の過失であるといふので一同火の如くに怒つたが、もう何んと云つても仕方が無い、太閤殿下一代の心血を注がせた名城を、無慘にも數日の中に破却されるのを、神經質の淀君が黙つて見て居やう等は無い、老女も玉の局を使者として、兎も角も中止ある

やうとの旨を申し込んだが、本多佐渡守中々聞き入れぬ、さらばといふので態々京都へ使を遣つて、成瀬隼人正へ抗議を申込んだが、隼人正は存じませぬといふので少しも取り合はぬ、摺たもんだといふ中に、一方では佐渡守が數萬人の工夫を促して、夜となく晝となく取り毀つたから堪らない、淀君の使者が彼方此方して居る中に、塹壕は埋められ、構へは毀たれて、大阪城は只本丸を残すのみとなつた。

流石の修理太夫も此の軀を見て驚いたが、今さら何うすることも能きぬ、由て嚴重に本多佐渡守へ掛け合ふと、佐渡守はとぼけた顔をして

「さて、無慘にも破却したるものかな、我れ病氣にて引き籠り中、倅に任せ置いたる中、斯様な疎忽を爲出来した、然し御和睦調ひたる上の事、再び合戦にも及ぶまじければ、これが却て吉瑞かも知れませぬ」と挨拶した、修理太夫は怒るにも怒られぬ、

「再び合戦にも及ぶまじければ」との一語が覺束無くも秀頼母子を慰めて、この破却が或は兩家和親の基かとも歎んだ、然しそれは眞の暫くの間で、大阪城は第二の窮厄に陥つた。

第二の窮厄とは何んである、一たん城中の鐵石と頼んだ十萬からの士卒である、これは秀頼が浪人を集めると聞いて寄り集つた連中であるけれど、今は歴とした秀頼の家人である、和睦が成立したか

らと云つて、解放することも出来ぬから、矢張りもとの如く召し抱へにはなつて居たが、悲しい事にはその多くの士卒を扶持するだけの物が無い、甚だしきに至つては、今度の戦功を表彰すべき餘裕も無い。

秀頼は全く貧乏して了つたのであつた。

(七十五)

太閤が遺して置かれた有名な金の馬も、もう八九分までも費し盡して、他に餘財と云ふはなかつた、京都大佛殿の建立やら、今度の戦争やら、淀君の道樂した神社佛閣の修葺やらで、どの位金を使つたかも知れぬ、そこへ以て来て秀頼の所領といふは、攝河泉百萬石に過ぎぬのであるから、とても十萬人からの士卒を十分に扶持する事は出来なかつた。

それも一月二月はどうか斯うかして来たが、もう三月からになると工夫が附かぬ、おまけに戦争後は京阪地方の物價が上る、貴ぶ物が少なくなつて出す物が多くなつたから、勢ひ生活に困難する。

この十萬人からの士卒が、大閤譜代の家人であつたならば、少しは身を慎んで時の來るのを待つたかも知れぬけれど、その多くは浮浪の徒で、各藩の亡命者もあれば、お尋ね者もある、大阪を立ち退いて何處へ身を寄せる處も無い連中であるから、切取強盜は武士の習ひと理窟をつけて、ぼつ／＼強

盜を始めかけた、甚だしきは白晝兇器を提げて、民家を怯すものもあつた、それが爲め大阪市中は又も戦争が始つたほどに驚いて、大半は商賈を休み、夫てないものは親戚縁者を頼つて京都地方へ逃げのびた。

斯うなると諸國の無頼漢が、悉く大阪浪人と名乗つて、こゝかしこに蜂起した、さうして良民を怯かして、家財を掠め、旅人を剝ぎ取り、遂には往來の人までに危害を與ふるやうになつた。

そこで大阪でも打捨て、は置けんので、多少は防備の用意もしたが、金が無くては制し切ることが出来ぬから、三月二十日淀君の手許から大藏局と正榮尼、秀頼からは近侍の武士青木一重を大御所の許へ遣はして、和睦の一條件であつた所領加増の事を申し出た、大藏局も正榮尼も、駿河の大奥には知邊が多いから、運動に如才は無い、恰ど此時は尾張中納言が淺野の娘と婚禮を爲さる時であつた。

大御所は何日の會合にも如才ない、二人の女を御前へ召されて、

「諾しく、秀頼藏入の事は私が承知して居る、これは將軍家とも相談して、きつと自分の立ち行くやうにする」

「何分お願ひ申します、淀様からも内府様からも、大御所様御袖にお縋り申して……」

「心配致すな、可愛い孫の婿を餓えさするやうにはせぬ、然しそれは兎も角も今度尾州中納言が淺野の娘と祝言をせられるので」

「誠にお芽出度いこと、私共よりも御祝儀申し上げます」

「それに就いて頼みがある、何うもこの關東の女どもは、禮儀作法を辨へぬ、幸ひの折柄ぢや、お前方二人で助けてはくれぬか、祝儀の終り次第、私も京都へ行くつもりぢやから、その上で秀頼殿入の事も極めて遣る」

尾州家婚禮の席へ列するのは、二人の女も多少の名譽であるから原より異存あらう筈は無いが、それよりも嬉しいのは、尾張から京へ上つて秀頼の所領加増の事を取り計らうと云はれた事であつた。二人とも慎んで承諾する、そこで青木一重は一步さきへ大阪へ歸つて、駿府の次第を秀頼母子へ復命した。

知行加増せば士卒に十分の扶持を與ふことも出来る、さすれば諸國の騷擾も自然に止むであらうといふので、秀頼も澁君も頼み難い事を心に頼んで家康の入洛を今日か明日かと待ち焦れた、その中に士風は益々亂れて來た。

(七十六)

大藏局と正榮尼とが、他念もなく尾州婚姻の用意を手傳つて居る中に、諸國から悪い注進が續々來る、大阪では又々浪人をお召し抱へて、その勢は二三十萬騎にも及んだ、去年極月の軍勢に比べると殆ど三層倍であらうが、大坂の御家人は御知行の足りない爲め、淀川筋に出没して船舶を妨害する、中には西國筋の諸大名から京都へさし上す貢物までに手を附ける、奉行を殺したものとさへあるとか、城中には盛に守備をする、又々戰爭を始めるつもりだとか、ざつとこんな類であつた。

こんな注進が毎日幾千通ともなく來る、家康は心に笑を含んだけれど、表には苦い面をした、そこで京極忠高と大野治氏とを使者として、大坂の罪狀を問はせた、所謂御不審の條といふのは斯うであつた、

一 大阪にては籠城中の士卒を諸國へ分散して、切取強盜をさせられて軍用金を作るといふ噂がある。
一 淀川筋に見張の士卒を置いて、往來の船舶を留め且は西國諸大名よりさし上ぐる船舶にも害を與へるといふ。

一 近頃は城廓の普請に取りかかり、一たん埋め立てた塹壕を浚へ、城櫓を建てるといふ、それが爲に流言絶えず騒動して、京大阪の人々その塔に安んぜず、各地に分散するとの噂がある。

一家康は前の和睦の次第に由つて、秀頼殿藏入を増加へんと思ふやささ、斯様な風説を耳にするは

甚だ以てその意を得ぬ、これ然しながら秀頼弱年の身を以て、樞要咽喉の地たる大阪に居城するからである、之が爲め再び騒亂を招く様の事あつては、朝廷へ對しても相濟まぬ、因て暫く和州郡山へ處替をするがよからう、其間に世上の騒ぎが鎮れば又々大阪へ還して遣る、七十に餘る家康、孫の聲を悪いやうにはせぬ。

前の三箇條は表面の御不審で、後の一箇條は秀頼へ内々の御沙汰であつた、この公然の使者を得た大阪城中は、宛ら鼎の湧くが如くてあつた。

そこで秀頼母子の御沙汰とあつて、更に大廣間へ大會議を開かれた、然し城中の二明星と呼ばれた真田と後藤とは病氣と云ひ立て、出仕せぬ、由て其の他の人々で色々の評議をしたが、去年の暮とは異つて、一たんと睦した後であるから、士氣頓に沮喪して居る、よし戦争となつた處で、肝腎の兵糧が無いのだから、とても十分の戦ひはなるまいと首をひねつた。

爾う斯うする中に、家康は尾張から京都へ入られる、大藏局と正榮尼とは、尾張家の祝言に笑ひさいめいて、何んの氣も無しに歸つて來たが、斯うと聞いて驚いて、それでは又戦争を爲さる下心かと、家康入洛の事を淀君へ披露した。

それと聞いた諸將は最う仕方が無い、太閤の御血脈たる内府様を、いかに世が世なればとて、郡山

へ送り參らす事は出来ぬ、君辱めらるれば臣死すとはこゝである、潔く合戦して今度こそは勝負を決しやうと決議した、そこで木村重成、家康よりの使者に對面して、三箇條の申し開きをするといふ件になる

(七十七)

木村重成は原より開戦論者であつた、家康の目の黒い中に、豊臣家が滅亡の運命を持つて居るのを、疾より見ぬいて居るのであつた。

秀頼の御前會議で、いよく開戦と決した翌日、家康の使者たる京極忠高、大野治氏を城中へ招いて、嚴然と對面した、忠高は淀君の妹常光院の息である。

「長州へ訊ねる、秀頼公はいよく和州も國替を御承知かの」
重成はびくともせぬ、さつとなつて、

「いや、その御返答を申すに先ちて、まづ此方よりの申し開きを致さねばならん、第一は諸國に強盜蜂起の事、之は秀頼公の關り知らぬ事、當時天下の政を知ろし召すは江戸將軍秀忠公の外になら、さすれば夫等不逞の徒は、將軍の御權勢を以て立ちどころに御成敗あるが至當かと心得まする」
「らむ、されば其の儀、大御所様へ申達する、而て淀川騷擾の御不審は……」と、忠高は又問ひか

けた、

「その儀は此方より故隙申し上ぐべき筈、原の起りを尋ねれば關東の奉行衆、故なくして當城の材木をお引き止めなされたからちや、何れの家人も主君大事に思はぬはない、自分奉行の材木を引き止められ、のめくとして歸るべき様なれば、據なく劔戟に訴へて、黑白を争ふたかも知れぬ、さすれば曲は彼方にあり、秀頼公へ御不審のあるべき筈無しと、憚りながら存じまする」

「諾し、さらばその事も大御所へ申し上ぐる、而て壕を堀り、城格を建てたる事、よも籠城合戦の用意でないとは申されまい、此の儀御返答がござるか」と、大野治氏はしたり顔で問ひかけた、

「いかさまお訊ねの通り、一二の壕を堀り、城格の普請致したに相違なけれど、籠城の用意と申すては決して無い、舊冬御和陸整ひたる時、大御所様よりの申し出には、只表面堀石崖少々ばかり被却すれば足るとの御事なりしも、山の場になりては御奉行本多殿の疎漏となりて、二の丸三の丸までも手を附けられ、秀頼公にも御案内、直に佐渡守へ故障の使者を送り給ひし事、大御所様にも御存じな事はあるまじと推察致す、さすれば打ち捨て置き難き二三箇所、假し御譜請を爲されうとも、深き御不審はあるまじさ筈かと、重成は思ひまする、家康公天下の勢ひを以て、高の知れたる一城を攻むるに、正しき録を用ひさせられず、却て詐りを以て城廓を取り毀たせ、剩さへ孤城援けなき當家へ向

つて、左様な難題を云ひ掛けたまふさへあるに、未だ實否をも糺したまはず、都近くへ大軍を集めたまふこと、全く御當家を攻め亡ぼしたまふ御手段と察し奉る、大御所御深意斯くておはさば、いかに申し開き致すとも、よも御耳は貸したまふまじ、重成不肖なれど命二つは所持致さぬ、御不審晴れずば戰場にて御目見得仕ると、御兩所よりお傳へ下され」

重成の詞は宛ら烈々として火の原野を焼くが如きものであつた、さすがの二人もこれに返す詞は無く、さらばその事大御所様へお傳へ申すであらう、と云ひ置いて退出した。

重成の返答は確に開戦を意味して居る、忠高と治氏とは早馬に鞭を當て、淀川堤を京へ急いだ。

(七十八)

忠高と治氏とは都へ歸つてこの事を家康へ復命した、家康は只領いたばかりで二人には暇を取らせた、大阪方が斯う強硬に出やうとは、流石の老將軍も豫期しては居なかつたらしい。

そこで例の本多佐渡守や天海僧正を呼んで、幾度か密議を開いた末、四月二十三日然も夜に入つてから、病氣で引き込んで居る片桐且元を呼び出した、家康の周囲には本多安藤永井板倉などの老臣が詰めて居る。

「市正、近う」

家康は莞爾して詞を掛けた、且元は膝を進める、

「お身を呼び出したのは餘の儀でもないが、今度又大阪の秀頼が私へ難題を云ひ掛けた、私は可愛い孫の孫であるから、別に隔心は無いけれど、例の淀様の癖み根性で廻り氣の多いには困るぢや、此間も京極 忠高を使者に遣はした處が、お身の知つて居る木村常陸の倅が、さんく理窟を云ふたさうな、斯様なこと將軍家のお耳へ入つては宜しくない、お身の働きて秀頼の心を和けてはくれまいか」家康の心では、大坂の要害を破却する、天下の勢ひを以て攻め立てなば、何んの苦もなく攻められるから、別に和睦する必要を認めては居ないけれど、秀頼の側にはまだ真田後藤藤木村の面々が居る、これ等の猛將が死を賭して働いたら、味方の勢をどの位殺ぐかも知れぬ、これは片桐を玉に使つて今の中に和睦して、秀頼を和州郡山へ押し籠めた上徐に策を施したが上々策であらうと考へたのであつた、けれど老功の且元その手には乗らぬ、板倉周防守に膝を向けて、

「只今の御説、謹んで御受け致すべきの處、御存じの通り老境、殊には去年大阪を退轉致してより、再び武門の交り致すまじき心底にて、再三歡居の事を願ひ申したれど、今日までお兎しの御沙汰も無く、却て仕官お仰せ付けらるゝ、大御所様の御厚恩、死するとも、忘却は仕らねど、私の心ならぬば御辭退申して、不束ながら俸出雲守を駿府へ差しだし罷りあれば、最早や私へは御用命もあるま

じきかと思ふ處へ、思ひ掛けも無き只今の御沙汰、防州どのも老人の心をお察し下され、今更何の面目あつて、大阪城中へ参ることが出来ませうぞ」

云ふ中にはらゝと涙を流した、周防守はその詞尾を捉へて、

「さらば貴殿、只今の御説御聽き入れはござらぬかの」

「いや、何うあつても聽き入れぬとは申しませぬ、大御所様の思し召し次第、この市正の白髮首を賭にして、再び内府様御前へも出ます覚悟」

「大御所様思し召しとは」

「外ではござりませぬ、秀頼公を只今までの如く大阪城に置かせられて、攝津河内二箇國の上に、五畿内又は大國の中、上品なる土地三箇國ほど進ぜらるゝとあらば……」

「これ〜」と家康は聲を掛けて「市正、お身も年が老つたのう、私の云ふのはさうぢやない、秀頼暗弱なればこそお身の忠義も用ひず、佞奸邪智の詞を信じて今のやうになつたてないか、さすればいかほど藏入を増したりとも、彼の心を増長さするばかりぢやわ」

(七十九)

市正は瘦せて蒼白くなつた顔を擡げた、然もその云ふ所は血を嘔く様な聲であつた。

「上意御有理でござりまする、秀頼公の御過失があらはせばこそ、太閤傳來の御知行をも失ひたまひしなれ、最も先日且元が申し上げたる忠言には、幾分の謀計も加はりて、眞の忠義とは申しがたかりしかと存じまする、さ、それを何故と御訊ねなさせられへ、内實は大御所様御内意を受けたる儀もおはして、且元の本心より申したる事にては……」

「周防、周防」

「はッ」

「乃公は再び市正の顔を見やうと思はぬ、大阪の事は追ての沙汰に及ぶであらうわ」
云ひ捨て、奥殿へ退いた、且元は後を見送つて、

「防州殿、我等は大御所様に盡すだけの事を盡いた、此上は御不興を蒙らうとも恐ろしうは思はぬ、只残念なはこの市正智慧足らず、大御所様の長き舌に乗せられて、太閤の御恩に背きたる事は無いかと、且暮心に思ひ惜むことぢや、何れも失禮は御免下され、只今防州殿へ申したる事、まこと市正の本意でござるに由て、後々御訊ねどもあらば、そこを善きに御執成を頼み存する」
列座の面々は且元が不撓不屈の精神に、多少の同情を注いだらしい、且元はそれにて退出した、

家康が且元を玉に使つて、再び大阪を舌の上で弄ばうとした計略は、且元が不撓不屈の口上で齟齬となつた、然し家康は豫て且元の忠勤苦衷を諒として居るから、その夜は非常に立腹したけれど、翌日板倉周防守を以て、

「且元が昨夜の口上は上を憚らざる致し方故、一旦は御立腹ありたれど、その言上の趣理無きにあらず、殊に強みある返答、心中には健氣に思し召す、今は別に心中に懸けさせられたる所なし、由て其の方も心中に、扱ひべからず、向後は遠慮なく御前へ罷り出るやうに」との御沙汰があつた、家康が士卒を懐くるのは、いつも此の手を用ふるが多い、

この中に大阪ではいろ／＼戦鬪の準備をする、然し去年冬の陣とは異つて、士氣が少しも引き立たぬ、一たん破却せられた處を急に修復しやうとするが、是が又容易でない、其中に極めて不祥な事が起つた、それは太閤以來豊臣家に大恩を受けた織田有樂の子の長音といふが、秀頼を見限つて京都へ出奔したのであつた、今戦争といふのに、主を見限つて出奔するものゝ出来るのは、餘り景氣の好いものではない、人々肩を擦めて居ると、有樂も頻に氣の毒がつて、何んとも申しやうもない倅の致し方、諸老臣に對しても辨解がない、只今より参つて兎も角も長音を伴れて参る、御制敗はその上の事に願ふてござるといふので、倅の後を追ひかけた。

然しこれは眞の人情を縛る縁、實は家財家具を船に積んで淀川を上つたのであつた、この宗匠、矢張り隨徳寺を極めたのだ、

奥向の事は、今迄修理と有樂とて切り廻して居たのが、有樂の出奔してからは、大野修理の一人舞臺となつた、これが秀頼の爲には、どの位不幸であつたかも知れぬ。

(八十)

大野修理ばかりなれば、秀頼の一言で何うともなる、けれどその後には淀君が附いて居る、何事も「御母儀さま」の御仰せといふので、一同が首を下げるから、修理太夫はこれを好い事にして諸將を抑制する、諸將の不平は一通りてない、

處がこの修理太夫の弟に、主馬介治房といふがある、兄とは異つて正直でもあり、勇氣もあるから、随分これまでに手柄もあつた、けれど親の道犬が修理太夫の手の裡に丸められて、何事も治長々々と尊敬するから、主馬介の功勳は何時も縁の下の舞ひになる、それらの事から兄弟が犬と猿で、始終事論の絶え間も無かつたが、今度また關東と確執に及んで、今にも戦争が始まらうといふ、冬の陣和睦は修理太夫の心得違ひから、家康に乗せられたのだと云ひ、豊臣家を滅ぼすものも、つまりは修理太夫であるといふ、この噂を聞くごとに、治房は齒を噛んで口惜しがつた、其處へ以て來て修理太夫例

の確執から四天王の献策は悉く斥けて一つも採用せぬ、それが爲に大野一家の評判が甚だ悪い。

兄の悪評、家の誹謗を聞くごとに、治房は身も世もあられず悲しんだ、それで自分の股肱と頼んだ松永勘兵衛を側近く招いて、

「乃公も兄弟に毎度ながら耻辱を受ける、殊に此の度又關東と確執となれば、勢ひ天下の勢を引さ受けて、花々しく戦争をせねばならぬ、そこへ例の兄が邪魔をして、四天王の下知に背くやうな事があつては、大事の戦争にやみ／＼討死するかも知れぬ、兄さへ無くば大阪の軍はきつと花が咲くであらうもの」と涙ながら懇諭を溢した。

勘兵衛は音に聞こえた氣早者、殊に厚く主馬介に恩を着たことがある、兎ても角でも討死するものならば、大恩受けし御主君の爲めに一奉公せては協ふまじ、と斯う思つて、一夜修理太夫が櫻の御門を通る時、待ち伏せして切り掛けた、けれど手頭狂うて肩口に微傷を負はせたばかりであつた、是れはと思つて太刀を取り直す處へ修理太夫の家來が駆け付けて切り殺した、翌日見ると、主馬介の家人であつたから城中の者皆目を見合せた。

これは只是だけの事であるけれど、それが爲に猜疑心が愈よ深くなつた、兄弟刃を以て勢力を争ふやうで、大阪の頭領になることは出来まいとの恐れが、人々の心に起つた、これが大阪方の爲どれ

程の弱點かも知れぬ。

大阪の城中にこんな事が屢次あつて、人心や、離散しやうとする處へ、家康からは間者を放つて、城中の諸將を吊り出さうとした、中にも大阪の精神であり精華である眞田左衛門へは信州上田城を遣る、木村長門守へは早く城中に見切りを附けて、今の中に此方へ來い、すれば江州一箇國を與へるであらう、其の他後藤又兵衛へは播州を遣る、長曾我部盛親へは土佐を遣ると、利祿を以て招いたが、誰もこの勸めには従はなんだ。

誠に仰せは有難い、けれど今大阪は孤城落日の有様である、太閤の遺業も水の泡にならんずる處である、我々が死すべき時節は目前に見えて居る、この狀、この機を捨て、利祿に附くのは志でないといふので悉く辭退した。

家康が大阪に手を入れたのは是が終局であつた、四月二十五日遂に諸大名へ進軍の下知を下した。

(八十一)

當時大阪に立て籠つた將卒は、十二三萬騎であらうと註せられた、それを統轄するに木村眞田後藤長曾我部の諸將がある、けれど家康の目からは只の塞を攻めるよりも容易う思はれて居た。

それを何故かと云ふと、冬の陣の時には兵糧の用意をする事凡そ三十萬人、一日に千五百石を當て

られ、遠國の兵卒にはその二倍を下されたが、今度の御陣には賄支度で膳米五升、干鰯一枚、味噌、鯨節、香の物少しといふのであつた、これ三日の糧食を支うるに足る、すると家康はさしも天下の名城と諺はれた大阪城を僅か三日の中に攻め落す心算であつたと見える、否、否、天下の名城と諺はれたのは外、郭外壕が元の通りであつた時の事、已にその外壕へを破却せられたのであるから、名城は名ばかりでその實は無いのであつた。

この事が大阪へも聞こえる、大阪の諸將もそれと覺悟して討死の用意をする、中にも木村重成は、この一擧で父の汚名を雪がうといふ心がある、豊臣家の爲めに身を殺して、木村家の名を清うする心がある、大野修理から割り當てられた持口に由ると、重成は先蹤を追ふて今福口と云ふのであつた。

四月二十六日城中から家へ歸る、この時も母の右京太夫局はまだ逗留して居た、今にも關東の大軍が押し寄せて來たら、重成は討死と心を極めて居る、そこで右京太夫局を始め女房も菊、家人の中にも格別の關係ある草加市郎兵衛今岡大兵衛山口定之助内藤新十郎などを座敷へ招いて、それとなく別れの盃を汲み交して、大兵衛は城中の取沙汰で、近々戦争のある事を知つて居る、今度も又主人の大事に、江州へ使者の役でも割り附けられると大變だと思つたから、そろ／＼繩張りをし始めた。御前、私は昨日から腹が痛んでなりません、最も手廻りの御用事はどのやうな事でも勤まりますけれど、

どうも遠路は歩けまいかと心得まする」
重成は早くもその心を察して、

「大兵衛氣遣ひするな此ん度はお前を煩はしはせん、恰と母上がお越しになつて居るから、母上へお願い申さうと思ふ」

右京太夫局は何んの事か解らぬ、

「大兵衛何事ぢやの」

「いえ母さま、是は斯様でござりまする、私弱年の身を以て重く用ひられ、當時一方の旗頭とも呼ばれ居りまするは、全く義郷様の御蔭と存じまする」

「夫はさうぢや、御恩を忘れてはなりませんぞ」

「それ故何事に依らず、只今までは一度義郷様へお知らせ申し上げる事に致して居りました、現に先年茶臼山御陣所へ起誓文受け取りに参りました節も、この大兵衛を遣はしたる處、殊の外の御感賞で、お賞めの詞を戴きました」

「さうあらう、義郷様御歡びの御様子を目の前に見るやうな」

「其處で今度の合戦でござりまする、冬御陣の時とは異ひ、お味方の勝利はまづ覺束なからうかと恐

れながら推察し奉るに由つて、申さば此の度が一期の合戦、母上にも義郷様にも、長のお別れと相成るかも知れませぬ」

一座は五月雨れた、局は黙つて聞いて居る、

「全株ならば私、お暇乞ひに参る等でござりまするが、只今の折柄、左様にもなりかねまする、由つて誠に恐縮ながら、母上私にお代り遊ばして義郷様へ私の決心をお傳へなされて下さりませぬか」

(八十二)

大兵衛は胸を撫でた、然し局は女儀の事、この返答を何んと云ふてあらうかと人々手に汗を握つたが、さすがは重成を手に持つほどの人、軽く頷いて、

「私も義郷様へはいろく御禮申さねばならぬ事がある、お前に代つて江州へ参るであらう」

「それではお越し下さるか」

「お前は常陸介殿只一人の遺胤、花々しく討死しやるのを見届けて行きたいが、私にまたこのあたり

にうろく致しては、却てお前の覺悟を鈍らせる様なものぢや、潔う盃致しての」

市郎兵衛は詞も無く酌に参る、局は盃を取り上げる、お菊は姑の心を思ひやつて、獨り暗然と涙を流して居る。

「御母儀さま、御酌に参りませう」

「日頃は好まぬが、今日は一献参る、浪々ついで下され」

市郎兵衛は心得て酌をする、局は快く飲んでそれを重成へさす、重成から再び局、局からお菊、お菊から重成、重成から市郎兵衛、それから段々と一座へ盃が渡つて、

「嫁女にも甚う苦勞をかけたが、私は今日江州へ出發する、此の度の合戦、城方の御勝利夢にだも願はれさじ、人間の中にも武士は櫻の花に譬へて、散り際を大事といふ、此上の介錯は嫁女の役、見苦しき最後させて、人に後指をさされるやうな事をして下さるな」と始めて心の花を見せた、

「慮外ながらお氣遣ひなされますな、及ばずながら私も重成が妻、當家の瓊璋になるやうな事は致しませぬ」

「あゝ、それを聞いて安堵する、さらば是れから」

局は心を決めて起ち上つた、餘り急であるからお菊は驚いて、

「まあお宜しいではござりませぬか、これが今生のお別れ、切めて今宵一夜だけ……」

「いや〜爾うしては居られぬ、少しも早う佐々木の殿様に逢ひたい、重成どの、さらばてござらぬぞ」
重成は止めぬ、

「随分御無事で……」

「お身は潔う」

「さらばござらぬぞ」

市郎兵衛、大兵衛その他の人々は口を揃へて引き止めた、けれど局は袖を拂つて、飄然と出立した。

市郎兵衛を始めその他の連中も、今度の戦争には生還を期して居ない、これが今生の別れであると思ふと、いかにしても名残が惜しい、門前まで見送つたが、やがて元の座へかへつて、更に別れの宴を開いた。

斯ういふ中に、關東の大軍は追々迫つて、大阪城は時々刻々非運に傾くのであつた。

(八十三)

關東大阪の和議再び破れて、大阪城の危機は今正に一髪となつた、四月二十八日秀頼は木村長門守重成只一人を召させられて、去年の冬は家康の本陣となつた茶臼山へ上らせられた、折から日は麗かに、見渡す限りの麥畑を照らして空は何んとなく暗淡たるものであつた。

「重成」と秀頼は長門守を近う召させて「まだ敵は寄せぬと見ゆる」

重成は畏りて

「去年の冬、此茶臼山に御兩家御和睦の起誓文を受け取つたは私でござりました、その墨の跡もまた乾かぬに、早く已に御和議も破れとなつて、河内攝津の野や山に兵どもの血を彩るかと思へば、重成只心外で堪へられませぬ」

秀頼は一種の感に胸を打たれたらしい、暫くあつて、

「今度の合戦、お身の持口は何處やらであつたのう」

「今日奉行よりの御沙汰を承りましたる處、八尾久寶寺と申すやうにござりました」と、重成はいつの場合にも沈着して居る、

「八尾久寶寺へ駆け向ふと云ふか、私は只お身の忠節のみを力とする、去年の陣に今福堤の合戦で、佐竹の大軍を追ひ斥けたるが如く、今度も又拔群の勳功を現はしてくれてあらうの」

秀頼の詞は、一もと葛の自ら立つ力はなく、稚樹の松をも力にする態見えて、憐れとも憐れの極みであつた、重成は感極つて泣き出した。

「兎角は御武運御長久を祈り奉りまする、それについても、舊冬の茶臼山に大御所の血書申し受けたる時、私は心に深く覺悟したる事候ひき、されど武運拙く……」

「え、深く覺悟したる事とは……」

「只管近づき奉りて。是非とも君の御節儀を散らし参らせんと存じたるが、弓矢神は只將軍軍をのみ御守りところを見奉つれ、近習の輩、御座の左右に油断もなく詰め切りて見たる爲、遂に長蛇を逸して候ひき、その時口には申し上げざりしが、私随分と存じ、態と素肌にて参りし甲斐なく、本意を遂げ得ず、のめくと歸りし時の無念さ、只今この山へ供奉するにつけ、此の度の合戦始まりたるにつけ、君の御面を拜し奉るにつけて、腸を寸々に斷ち切る如く思ひまする」と云ひも果てず、滂沱たる涙雨の袖に降りかゝる。

秀頼は感に打たれて何んとも云はぬ、

「然し今申して詮のない事、この度の合戦には、御味方の勝敗に關はらず、兩將軍の御旗本と見奉つらば、一散に駆け入りて、御首級を申し受け、御當家千歳の基を立つるか、もしさらずば潔く討死して、冥途黄泉の御先驅致すべし覺悟でござりまする、合戦御利運におはしまさば、泉下に忠を報じ奉つると思し召されて下さるべし、兎角は申すに及ばず、是れが今生の御暇をてござりまする」と、熱血を飲む思ひて云つた。

秀頼は暗然として聞いて居る、日はいつの程にか暮れて、麓の樹蔭に繫がれたる馬の嘶き高かりき。

東西兩軍の戦機漸く熟して、五月一日總軍進發の命が下つた、そこで各々持口に兵を進める、後藤基次は河内の古市、長會我部盛親は河内の矢尾、重成は今福口といふのであつた。

然し敵はまた姿を見せぬ、重成心に思ふには、斯くて敵の押し寄せるを待たんこと、智ある者の爲すべきではあるまい、將軍家の大軍は平野街道を雲霞の如く押し寄せるとは聞くが、こゝには眞田、後藤、明石の諸將がお詰めなされて居る、自分は秀頼公へ堅く申し上げた事もあり、その後陣を敷くも益のない事、合戦は明六日と覺えた、よし、自分は自分で好陣地を見立て、兩將軍の旗本を西の横合より附け入り、只一戦に勝敗を決して呉れう、と覺悟した。

重成の眼中には、徳川の軍も何も無かつた、彼はいかにもして家康秀忠の陣中に突入りつて、豊臣家百年の怨敵たる兩將軍の御首級を申し受けやうと、覺悟して居たのである、勝敗何れに決するとも、兩將軍かく恙なくしてはさば、豊臣家の滅亡は近き將來に於て必ず來べき運命であらうと察した、彼が兩將軍の旗本へ突入りつて、一舉に勝敗を決しやうとしたのは此の爲めである。

そこで彼は山口弘定、内藤新十郎の二人を招いて、

「今日は上意に由つて出陣も致したなれど、向ふの足場悪ければ、敵はこの地へ寄すべしとは思はれ

ぬ、斥候の申す處を聞くに、敵は東の山際を通つて、平野街道へ押し寄せるといふ、されど此の口には眞田後藤の歴々がお詰めになつて居る、由つて我々は好き陣地を見立て、南を押し往き、兩將軍の旗本を西の方より横合に突かうと思ふ、後は兩人に頼み置く」

と云ひ捨て、單獨馬を進めやうとする、草加市郎兵衛、今岡太兵衛、馬の轡に取り纏り、

「千金の御身を持たせられて、只一騎御出懸け遊ばさるゝとはその意を得ぬ、切めては我等兩人御供仕りませう」と切に云つたが、重成は少しも聽かぬ、黒具足に身を堅めて、家内者只一人を引き連れ、五日の午の刻に今福を出て、所々を巡見したが、さて是といふ處も無い、その中に若江村の東の河原、廣くはあり、玉越川の流を引き廻して、堤の脇に柳を多く植ゑてあるから、兵を屯させるには極めて好い、由てこゝを自分の戰場と心に決め、申の刻今福に歸つて、總勢へ下知を下した、

「各々只今より休息して英氣を養ひ、今夜丑の刻までに若江へ集り候へ」

爾うして十分に部署を定めて置いて、秀頼の御前へ最後の暇乞ひに出た、秀頼と重成とは一つ違ひの若武者で、深く頼みに思つて居るから、

「早まつて取り返しのかねことをして呉れるな、私はお前を力にして居る、死ねば諸共であるぞ」と、世にも優渥なるお詞を下された。

重成は是れが今生のお別れと思ふから、それとなく御暇乞ひ申し上げて、やがて我が家へ引き取つたのは彼是酉の上刻であつたらう、不在を守る妻のお菊は例の如く大廣間に燭台を照し列ねて、良人の歸りを待つて居るのであつた。

(八十五)

それから暫く居間に入つて、何か取調物をして居るやうであつたが、やがて日頃手馴れた小道具を持ち出して、心利きたる若黨の篠兵衛といふを呼んだ、篠兵衛は六十近い老人で、重成の心のまゝに働いて居る、手をついて、

「何か御用ども……」

「篠兵衛か、合戦の最中に、斯様な事を頼むのは心ないが、和州長谷寺に私の従弟が僧となつて居る」

「へえ、其事はも聞き申して居りまする」

「その従弟の處へ、是等の品物を送り届けて貰ひたい」

「へえ」とは云つたが篠兵衛はびつくりして居る。

「夜中といひ合戦の最中、雜儀には思ふであらうが、特別に頼む、委細は書中に書き記したれば何事も申すに及ばぬ、口上は只重成より参らするといふて……」

「心得ました」

篠兵衛は旨を領して去つた、後へは江州以來忠勤を勵んで事へた市郎兵衛、大兵衛の二人の弟が、福島邊に商賣をして居たのを呼び寄せた。

「兩人とも久しいの」

「いつも御機嫌美はしく、恭悦至極に存じまする」

「さて呼び寄せたは別儀でもないが、今度の合戦、重成生きて再びお身等に逢はうとは思はぬ、我等亡き後は、ありて用なき家の道具ぢや、紀念として二人に取らす、いかやうとも處置致しくれ」

「御趣意は分りました、なれど……」

「不用ならば焼き捨てるとも、それはお身達の心任せぢや」

「いえ、不用と申すては……」

「さらば後の事頼み置く、武士の覺悟は金銭同様ぢや、女々しい事を云ふな」

斯う釘をさされては仕様が無い、二人も又泣く／＼旨を領して去つた、そこへお菊は自ら夜の膳部を運んで来た、見ると折敷に土器も載せてある。

「お心も辭陶しう、いざ一献召し上らせて……」

「好い處へ氣が附いた、さらば一つ、お身も參るか」

「私も」とお菊は涙も持たぬ「お相を致しまする」

重成は快く盃を舉げる、お菊は酌をする、夫婦水入らずの小酒宴、燈火は明く、五日月は西に傾いて、繁り合ふ若葉の上に杜鵑の音も聞こえる、

二三献あつてお菊

「御飯召しませるか」

「いや、飯欲しうは思はぬ」

「なれど、今朝も召させられぬ、陣中にも參らせたまはぬ、さるに又……」

「飯は欲しうない」と一言に云ひ切つて「今參つた酒で、いかう酔うた、歌へやうたへうたかたの、あはれ昔の戀しさを今も遊女の船遊び……」

明日の合戦を忘れたやうに、日頃好む、江口の曲を詠ひ出した、おきくは呆氣に取られて居た。

(八十六)

重成は甚く興に乗じて来て、

「鼓取れ、鼓取れ」

「えい、お鼓……」とお菊は愈々呆れた、

「この世の思ひ出に一曲打たうぞ、疾く疾く」

お菊は據なく座を立つた、此期に及んで歌詠ひ、鼓打たうといふ良人の心が恨めしくないではなかつた、重成は後を詠ひ續ける、

「それ十二因縁の流轉は車の庭に廻るが如く、鳥の林に遊ぶに似たり、前生又前生、會て生々の前を知らず、來世又來世、更に世々の終りを辨ふことなし……」

お菊は愁はし氣に鼓を取り出て、前に置いた、重成は手に取つて調べを見つゝ、

「或は人中天上の善果を受くといへども、轉倒迷妄して未だ解脱の種を植えず、或は三途入難の惡趣に墮して、患にさへられて已に發心のなかだちを失ふ」と且打ち、且詠ひ、頗る興に入つて居つたが、遂に扇子とりて立ち上り、

「然るに我等たま／＼受け難き人身を受けたりと雖も、罪業深き身と生れ、殊にためし少き河竹流れの女となる、前の世の報いまで思ひ遣こそ悲しけれ」

お菊は愈々惘れ果て、良人がさす手引く手、巧に舞ふ姿さへも見かねて居た、重成は愈々興に入つて、

「紅花の春の朝、紅錦繡の山、粧ひを爲すと見えしも、夕の風に誘はれ、紅葉の秋の夕、黄綱縷の林、色を合むといへども、朝の霜にうつらふ」と舞ひ遊ぶ。

此時おきくの父眞野豊後守は、重成の軍情を聴かうとして、態々遣つて来たのであるが、明日の合戦といふ今夜、一方の旗頭ともあらうものが、歌舞に遊びでもあるさうと興をなまして、挨拶もせず立ち歸つた、けれども菊はそれを引き止める氣も出ななだ。

重成は思ふ程舞ひ疲れて、元の座にとんと座つた、お菊は心を引き立てるやうに

「御前、御飯を召しましては……」

「いや、私は食べぬ、さうは酒や……」

「御酒参るを惡しいとは申さねど、明日は一期の晴の御軍、絶えて御飯を飯したまはずとは、まづかの時の驅引どもに……」



「心配するな、重成心で戦争をする、二日三日飯の力を借らずともぢや」

「なれど私、心許なく思ひまする」

「心許なく思ふとは……」

「今朝より今まで一粒の御飯召し上りたまはぬのみか、戦争の事に御心も置きたまはて、舞、鼓の御樂み、かくて一方大將とは目にも見えませぬ、只今父上御用にておはしたれど、あなた様は舞曲の最中、御心を驚

かし奉るも心なしと思ふてか、御挨拶にも及ばず歸りました、御飯参らぬは明日の合戦御胸につかへたまひてか、大事の折から舞、鼓を遊ばすは、御心にでも狂はせしか、私は只残念至極でござりまする」と、思ひ堪えかねて斯う云つた。

此の詞の激烈であつたのを、お菊も心に知らぬてはない、けれど激烈に云はねば、十分感動を與へる事が出来ぬと感じたものであらう、重成はさつとなつて、

「二世の後までも誓ふた、お身の目には爾う見ゆるかの」

(八十七)

お菊は悪びれぬ、詞を勵まして、

「いかにも見えまする」

重成は嘆息するやうに、

「人の心は夫婦の間でも見えぬと見ゆる、私は深く覺悟する事あつて、今朝より食事を絶つて居るのぢや」

「それが私には……」

「不審といふか」

「お心の程が分りませぬ」

「武士は生前の名を惜むやうに、又死後の名を惜むのぢや」

「さらば仍の事、御食事も召し食りて、お身體を健かに、天晴れ戦争遊ばさうといふお心が何故附きませぬ」

「天晴れ戦争、乃公は飯の力で軍配は振らぬぞ」

「さればと申して、まさかの時に腹の力甲斐なくては……」

「明日が最後ぢや、あらん限りの力を揮ふぞ」

「私、心配でなりません、女々しうは在せど、私の心も察し遊ばして……假令一晩の飯なりとも……」

「いや、食へぬ」

「さうありては人が御前を卑怯者とも……」

「なに卑怯といふか」

「さかにも蔭口云ふを目前に聞くが如く感じまする」

「何故な」

「あれ見よ、木村重成ともあらうものが、大事の合戦に後れて、飯一粒も咽喉に通らず、武士にあるまじき振舞ひしたりなんど……」

「飯食はぬが卑怯でない、私は思ふ所があるのぢや」

「さらばその思し召しのほど」

「聞かせといふか」

「承はつて安堵したうござりまする」

「昔末割四郎とて、八幡太郎殿御内に、知られたる剛の者おはした、この人、後三年の合戦に隨身して、人の目を驚かすほどの手柄もしたが、最期の一時に、上もない耻辱を受けたと云ふぞ」

「上もない耻辱と申しまするわ」

お菊の膝は少しばかり前みぬ、重成は例の如く沈着いて、

「敵方から射出したる征矢に、その四郎咽喉を射貫かれてお死にやつた、その時、その咽喉の創口から、その朝食べた飯が粒々として出たと云ふ事」

「え、淺間し」と、お菊は思はず戰慄する。

「重成こそ明日の合戦を最後とは、疾より覺悟もしつるなれ、味方御勝利ならば原より、武運拙く敗

軍とならん時、城方の大將たる身が、疵口より穢き物見せたりとありては、死後の耻辱此の上もあるまじいではないか、乃公が今朝から食を絶ちてあるはこの故ぢや」

重成は云ひ果て、又盃を擧げた、お菊は良人の健氣なる覺悟を聞いて、前ほどから言つた口上がうら耻かしく、座にも堪へず立ち上つて、轉ぶやうにその身の居間へ入つた、重成は小聲で江口の續きを諒つて居る。

(八十八)

長門守が食事をせぬのは、全く死後の名を惜むからであつた、死んで武士の面目を保たうとするからであつた、彼れは秀頼の前で云つた通り、味方の勝敗に關らず、大御所もしくは新將軍の旗本に突き入つて、花々しく討死しやうと云ふのであつた。

さうとも知らず、意見を加へた妻の身になつて見ると、面目なさに生きては居られぬ。

お菊は聞いてその身の居間に入つた、居間は懸然と片附けられて、時繪の香盆に青磁の香爐うつりよく、それより香が燻して居る、彼女はこゝに自ら裁ちて、一つは良人へ辨解もし、又一つは冥途の先驅をしやうとするのであつた。

「どうぞ……どうぞお恕し遊ばして……」

是が彼女の蔭ながら重成に云ふ詫言であつた。

「私は先へ参ります」と心に描いた良人の前に云ひ「さらば先へ参ります」と繰り返した。この場合にも女の嗜みは忘れぬ、良人が出陣に要する總ての調度は、悉く良人の居間へ出し置き、さうして良人の着るべき兜の中へは、日頃好む所の名香を焼き籠めた、重成はまた元の座敷で、江口の謠を誦つて居る、彼は一期の大事の合戦が、目前に迫まつて居るのも知らぬらしい。お菊は會て嬉しうこへ嫁ぎたる時の白無垢白装束に身を改めた、持佛には御燈明、香の煙。

「さらばござりまする」
懐劍逆手に抜き放したるよと見る間も無く、血煙颯と立つ中に俯倒となつて、健氣に敢ない最後を遂げた。

實に重成の妻として耻かしからぬ死狀ではないか、年は十八、花ならばまだ蕾なるに、月ならばまだ十三宵の光りなるに、

重成は斯くとも知らぬ、時刻が來たに驚かされて、

「お菊、お菊」と呼んで見たが返事が無い、立ち上つて彼れの居間へ行つて驚いた、けれどその最後の健氣なのを見ては、我が意を得たやうに打笑まらずには居られなかつた合掌念佛して、心の中には

此の上もなき供養の一語。

「私も後から……」

手早く鎧取つて投げかけ、兜を取つて見れば、鬱鬱たる名香の薫り、妻が日頃の嗜みも思はれて、流石に鴈を斷つ如くぞ覺えし、大兵衛は斯くとも知らず、縁端より、

「御前、もうお時刻、天もしらくと……」

「諾し」

重成は氣をかへて、つかくと玄關へ立ち出づる、三歳駒の嘶き、東の天の紫雲、西の方に傾く月の影、あはれ妻の魂のそこに涙ふが如く……。

(八十九)

重成は心の中に妻が健氣な最後を弔ひて、東雲の天漸く明き時、市郎兵衛大兵衛を左右に従へ、悠々として家を出づる、これを現世の御別れと思へば、今一度秀頼の顔見たく、城中へ馬乗り入れて、上様の御座所はと問へば、今大手櫓の上におはして、合戦の様を御覽する所なりと云ふ、やがて執次を以て「重成御暇乞ひに参りたる旨」を申し上げる。

秀頼は數ばせて「疾く是へ」との御説あり、重成執次の案内に伴れて、天守櫓の一室へ参れば、秀

頼は嬉しげに座を與へられて、

「方とするは身遠なるに、随分功名手柄して、勝敗に關はず歸り來り、秀頼の前途を見届け呉れよ」との御説あり、重成は謹みて、

「これが最後の別れかとも思ひまする、重成が合戦のやうは、こゝより詳に御覽せ候へ」と、申し上げて引き退る、昨日の様には引きかえて、孤城落月の味方の有様、こゝの廊下、かしの曲輪、萩の小庭に雨荒れて、秋蝶力なく飛ぶ様に見えた。

重成その日の扮装は、段々威の鎧に赤地錦の直衣、手には三間柄の大槍を提げて、乗り馴れたる三歳駒に打ち跨り、今福口の本陣へ立ち歸れば、六千七百餘人の同勢何れも今日を最後の覺悟、重成の姿を見るより全軍急に色めきて、堤傳ひに進發す。

見ると、東の山の手道明寺、譽田、田邊、國府表の山も野も、一面に燒き續けたる篝火、一天の星の數よりも繁く見えたが、その中にその篝火も一つ消え二つ消えて、夜はほのく明け渡る頃、道明寺の方面に渡つて、鐵砲の音夥しく関の聲山野に響いて、地煙暗く天を掩ひ、渦巻立ちて見え渡つた。

「さては後藤殿の先陣、已に敵と戦を交へたるやうなるぞ、後れて大阪方の耻辱を取るな、進め〜」

と下知しつゝ、首を返して東の山涯を見渡すと、南は道明寺、北は須奈、星田街道に至るまで打續き、寄手の大軍旗旌馬印金銀を鏤めたるが、幾千萬とも知らず旭に輝きて、壯觀なること云ふばかりも無し。

これに勢ひ十倍して、若江方面へ進んで行くと、赤地に金にて八幡大菩薩の旗三流、白地に紺にて橋を畫きたる旗一流、金の蠅取り馬印を押し立てたる一軍が、曳々聲で進んで來た、重成の馬の轡について居た大兵衛は

「井伊殿御勢と見えませぬ、御油斷遊ばしてはなりませぬ」と氣を注げた。

この赤旗の一隊が、徳川家の名物男井伊直孝の優勢とは重成も疾より知つた。

「敵に取つて不足無し、一同用意」と命を傳へて、その身は胃を取つて着し、忍びの尾の端を切り捨てた。

(九十)

井伊直孝は關東隨一の剛の者、軍勢に先立ちて下知をする、重成この軀を遙に見て「さて物々しや」といふまゝに中軍の二千餘騎中白の旗をなつとさし上げ、晴嵐朝まだきの霞を捲きて、宛ら山腰を繞るが如く「えい、えい」と關の聲を發しつゝ、蒐け出づる、その勢ひの猛烈さに、さしもの井伊勢群易

して、思はずもだちろく處へ、長門守重成時分は好しと思ひたれば、三軒柄の槍取り直し馬を躍らし面も觸れず雲霞の如き敵勢中へ駆け込んで、中るを幸ひ切り立て突き立て、瞬く間に八九人を突き落とす。

此の跡見るより重成の馬の前後を堅めたる市郎兵衛大兵衛、主の身軀に怪我あらせじと附き添ひて、是も劣らぬ奮激突戦、火花を散らして戦ふといふのは、斯う云ふ様を云ふのであらう。

大將已に斯くの如くなれば、相従ふ面々も勇氣日頃に十倍して、旗奉行の廣瀬左馬之助、手頃の槍を振りしごさく相組の士孕石備前を斃し、ついでかゝる二人の武士を物の美事に刺し殺したれば、井伊の前陣總崩れとなつて、旗本へとなだれかゝつた。

あはや重成大勝利と見えたる時、井伊勢の後陣に控へたる一柳盛物、生駒讚岐守、藤堂高虎の物頭中尾豊前、總勢すくつて二萬餘騎、重成が戦ひ疲れた六千餘騎を真中に取りこめて、火水になつて攻め立てた、木村の軍兵、討死は覺悟の前なり、潔く應戦して散り際美はしき櫻の花と散り失せるもの、瞬く間に二三百人、心は剛に、覺悟は石の如く堅けれど、鐵ならぬ身の悲しさは、鋭き火彈に支へかねて、ちりくりに亂れ騒ぐ、この機會を免すまじと、敵勢潮の如くに追ひかくる、長門守は味方敗北と見ながらも、肌は撓めず一步も退かず、向ふ敵には笑を含みて相手する、この時までも馬の

轡に絶り居たる市郎兵衛は無念の涙にくれながら

「口惜しけれど、味方の勝利、萬に一つも覺束なく見えまする、千金の御身を輕々しく捨てたまふは、秀頼様へ不忠の第一、早々御歸城遊ばせ候へ」と諫言した、なれど重成は聽き入れぬ、

「いや、重成已に最後の御暇乞ひを申し上げ奉りたれば、こゝこそ我れの墓所なれ、戰場に向ひて死地を去るは武士の耻辱、そこ退け」と鋭く云ひ、今まで持ちたる三間柄の槍は大兵衛に渡して、それよりやゝ小さき、二間柄の槍持ちて、馬廻りの者に向ひ、

「渴こそ覺ゆれ、その邊りに水は無きか」と問ひ掛ける、大兵衛心得、

「あゝ、あの柳の蔭にこそ清しき水音は聞こえて候へ、御柄杓を貸させたまへ」といふ、重成頭を掉り、

「いや、それへ参りて咽喉を露し、最後の合戦致さんづ」と、云ふ中に馬よりひらりと飛び降りた。さうして河邊へ立ち寄つて、水を掬んで咽喉を露し、見ると朝からの激戦に、八箇所までも太刀疵を受けて居た。

然しこれしきの事に屈するやうな重成では無い、力足を踏み鳴らして、忽ち又戰場へ駆け向ふ、堤の上に井伊の物頭川手盛物、十五六人の勢を伏せて待ち受けたが、それと見るより駆け出て、面も

ふらず切り入つた。

(九十一)

木村長門守が八箇所までも手疵を負ひて、若江川の清流に咽喉を露し居れる姿を、第一に見出したのは井伊家の斥候磐石内膳といふものであつた、最もこの若武者が城中一の剛の者木村長門守であらうとは知らぬ、只屈竟の大將らしいと云ふので、その事を先手の大將庵原助右衛門へ報告した、助右衛門聞いて、すはこそ善き敵ごさんなれといふので、槍をさして突さかゝる、重成は二間一尺五寸の直槍、その頃北國流とて流行りたるを取り直して、駆け合す、雙方開こえたる手練者、重成はこの槍を以て、助右衛門が内胃を二三箇所も突いたのであつたが、悲しい事には槍の穂足が短かつたので、僅かに頬の邊をかすつたのみであつた、助右衛門は一間半の柄に七八寸も身のある槍をべたりと張り除けて、重成を突き倒した、重成心は矢竹に逸れど、先刻からの合戦に身も心も疲れ、加之に入箇所までも傷を負ふて居るから、再び起き上る勢ひも無い、助右衛門は七十近い老功の武士、腕に珠数を掛けて、念佛云ひながら戦つたが、今重成の突き倒されたのを見て、馬より飛んで降りんとする處へ、同家中の侍安藤長三郎といふが駆け来り、

「拙者まだ一つの首級も揚げぬ、この首級給はるまじさか」と口早に云つた。

助右衛門は念佛云つて戦争するほどの武士であるから、首級を揚げる事などは餘り好まぬ、

「あゝ、安藤か、大阪の落城も日あらずと見た、敵の大將の首とるは易からず、與ふるぞ」

心易く云ひ放したので、長三郎は直ちに重成の首級を揚げ、重成が腰にさしたる白熊の旗を引き裂いて、その首級を包んだのであつた、

さてその首級を家康の實檢に備へた處が胃を取ると鬚の毛が薫じ渡つた、家康は沈と見て、

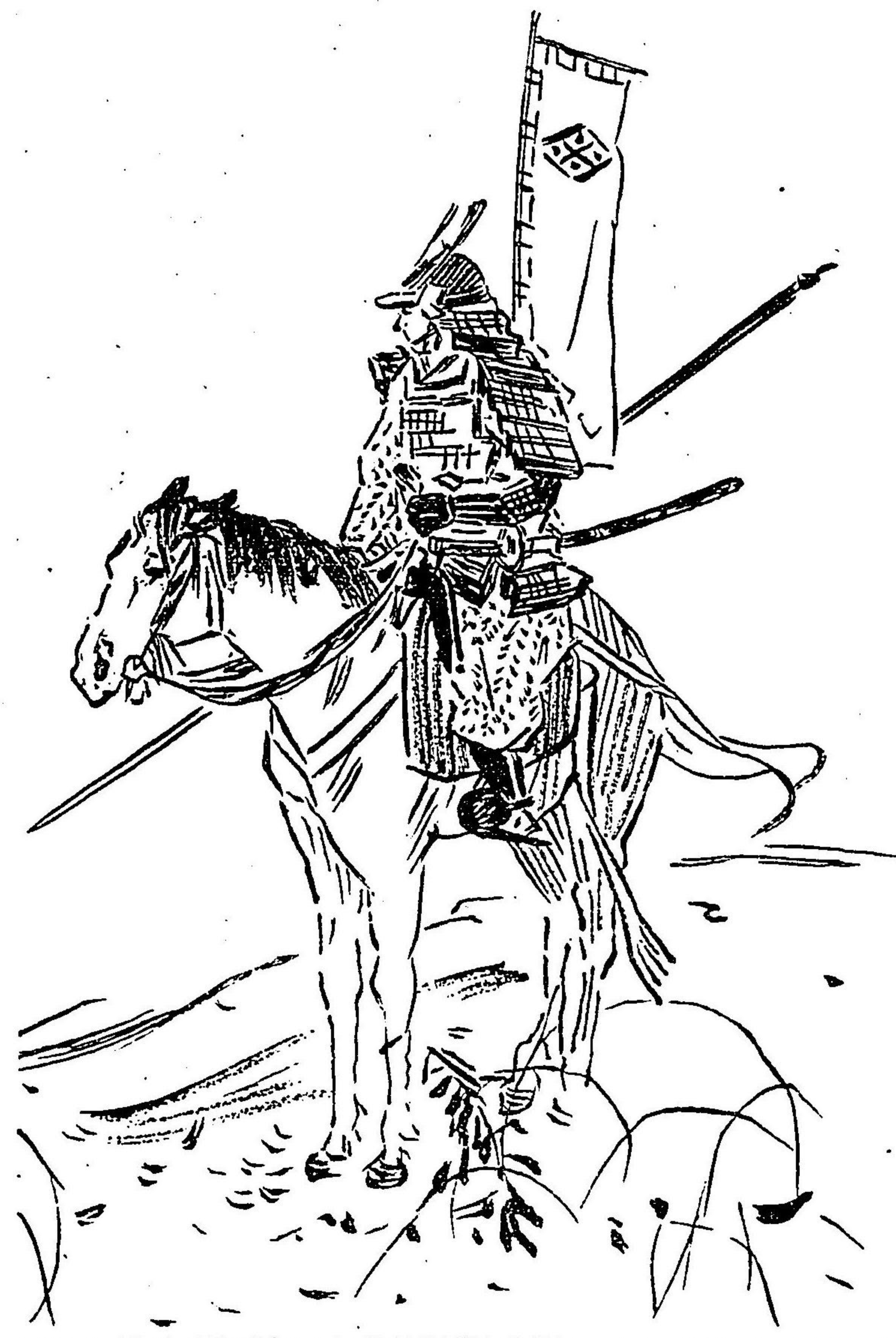
「この首級、木村長門に相違ない、若年の身でありながら何日の間に智慧附いて、斯る嗜みをするこどぞ、あはれ稀代の勇士かな、去年茶白山の陣中へ血判を取りに参つた時、眼ざし立振舞ひ尋常人にあらずと見たが、果して爾うであつたぞ」と、はら／＼落涙に及ばれた。

近習の面々はこれを開き、

「御説にてはあはせと、重成の討死は兼ての覺悟とも見え候はず、その證據には月代を剃つて居りませぬ」と叫んだ、家康聞かせて以ての外に氣色を損じ、

「討死の覺悟は月代にのみ由るてない、胃を着するには月代を剃らぬ故實もある、殊に伽羅を焼ぎ込みたれば、香りを残す爲に仕たるかも知れぬ、兎も角も忍びの緒を見よ」

と云はれた、見ると果して忍びの緒が切つてある、家康は頷いて、



「さもあらう、是れは再びこの胃を着まじとの心なれば、彼れの討死は覺悟の上ぢや、何れにもせよ、比類無き働として戦死したる長門守を、その方共の批判は推参なり、彼れが爪髪にても煎じて吞ませたし、志あるものは出て、胃を戴けよ」と仰せある、この詞の下より榊原飛彈守前み出て、胃を取つて戴いたので、大いに御機嫌を直されて、

「心懸けある若者かな、汝に取らす寶物にせよ」とてその胃を下された。

重成の最後は斯の如くてある、重成の死後は斯の如くてある、彼れの忠節、彼れの風流、彼れは長へに史上の花である。

木村長門守終

明治四十一年九月五日印刷
 明治四十一年九月十日發行

(木村長門守)

定價金七拾錢

著者 綠園生

發行者 東京市京橋區元數寄屋町二丁目十三番地 金尾種次郎

印刷者 東京市京橋區四紺屋町廿六、七番地 佐久間衛治

印刷所 東京市京橋區四紺屋町廿六、七番地 株式會社 秀英舍



發兌元

東京市京橋區元數寄屋町三丁目十三番地

金尾文淵堂

振替貯金口座三八一七番

文淵堂圖書發賣元

東京市神田區神保町	東京市日本橋區住吉町	東京市神田區神保町	東京市日本橋區吳服町	東京市日本橋區尾張町	東京市日本橋區船屋町	東京市日本橋區本銀町	東京市日本橋區鐵砲町	東京市日本橋區中橋廣小路	東京市日本橋區中橋廣小路
東	至	上	北	東	良	大	文	前	前
堂	誠	田	隆	海	明	洋	林	川	川
書	堂	屋	館	堂	堂	堂	堂	文	文
店	店	店	店	店	店	店	店	店	店
大阪市東區南渡邊町	大阪市東區備後町四	大阪市北區東梅田町	京都市佛光寺烏丸東入	名古屋市宮町	熊本市上通町	久留米市米屋町	熊本市新町	長野市大門町	長野市大門町
杉	吉	盛	東	名	熊	久	熊	長	長
本	岡	文	枝	古	本	留	本	野	野
書	寶	文	律	屋	市	米	市	市	市
店	文	館	書	宮	通	屋	新	大	大
	館	館	店	町	町	町	町	門	門
								松	松
								葉	葉
								軒	軒

明治四十一年九月改正

東京 金尾文淵堂

藏版圖書提要

宗 教 書 類

翌月信亨 鈴木暢幸
萩原傑來 加藤玄智

佛教大辭典

(近) 金拾八圓
小包料不要

黑田 眞洞
望月 信亨

法然上人全集

(三) 版 金貳圓五拾錢
郵稅拾六錢

浩々洞

清澤滿之全集

(近) 刊

山崎紫紅

法華經物語

(再) 版 金五拾錢
郵稅六錢

文 藝 書 類

草野柴二モリエール全集

(三) 冊 上下各壹圓
中卷發賣禁止

森田思軒

思軒全集

(五) 冊 一卷四拾錢
郵稅拾貳錢

三木竹二

芝居の型

(近) 刊

室田武里

無線電話

(近) 刊

河東碧梧桐

一日一信

(近) 刊

薄田泣菫

子守唄

(近) 刊

與謝野寛

櫛の葉

(近) 刊

小 說 書 類	
長谷川 二葉亭	うき草 <small>(新刊) 金壹圓貳拾錢 郵稅拾貳錢</small>
同 平	凡 <small>(四版) 金八拾錢 郵稅八拾錢</small>
内田魯庵	イカモノ <small>(新刊) 金八拾五錢 郵稅八錢</small>
同 二人畫工	<small>(新刊) 金八拾五錢 郵稅八錢</small>
菊池幽芳	月魄 <small>(二冊) 一冊九拾錢 一冊稅八錢</small>
同 秘中の秘	<small>(近刊)</small>
小笠原白也	嫁が淵後編 <small>(新刊) 金六拾五錢 郵稅八錢</small>
相川勝次 實事譚 美談	殿様勝治 <small>(一冊) 金六拾五錢 郵稅八錢</small>

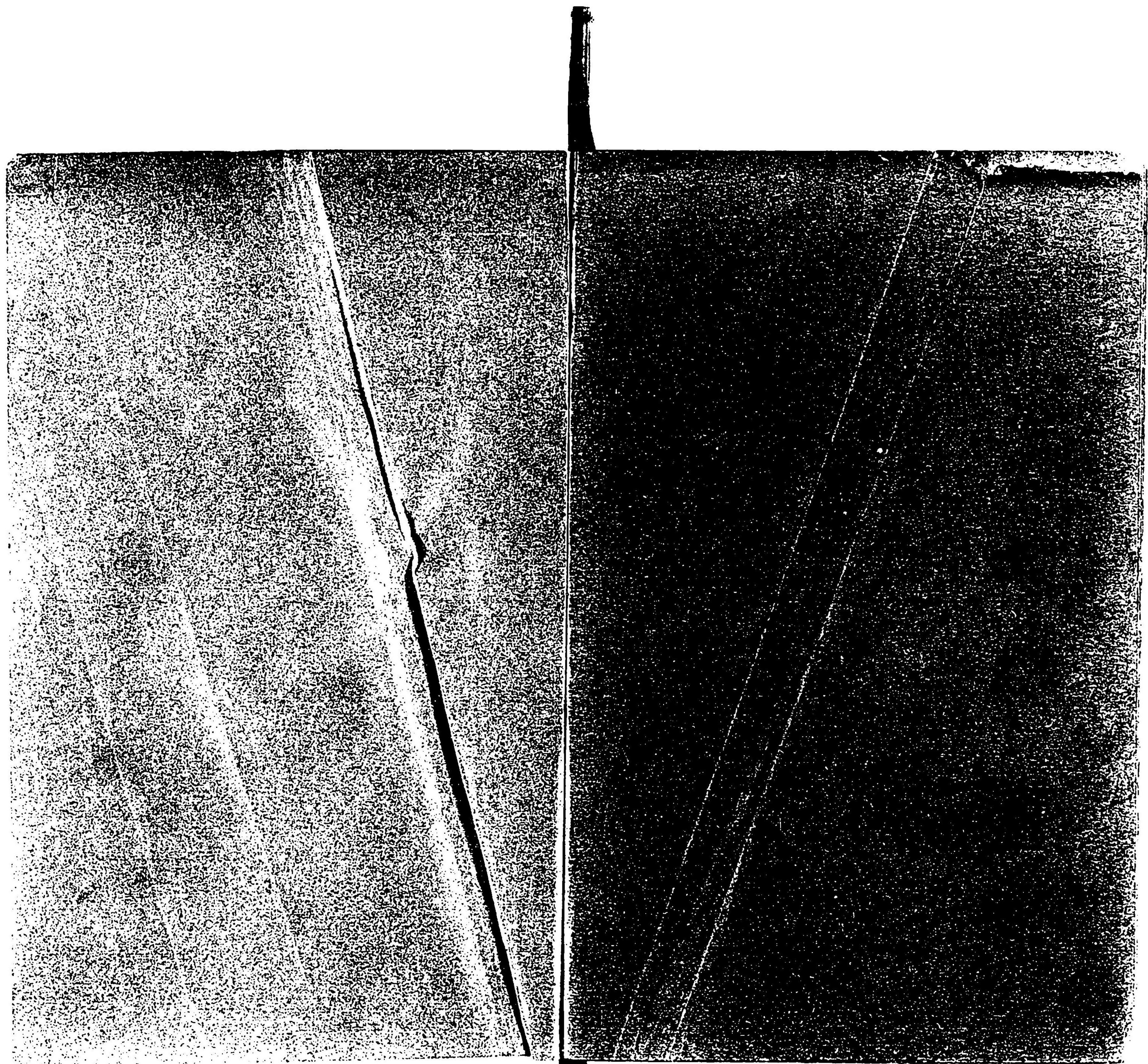
繪 畫 書 類	
杉浦朝武	富士山スケッチ <small>(四冊) 金壹圓貳拾錢 郵稅拾貳錢</small>
同	同 <small>(四冊) 金貳圓五拾錢 郵稅拾貳錢</small>
<small>特製百部限</small>	

綠園生著
和洋諸大家畫

綠園叢書 全部數十冊

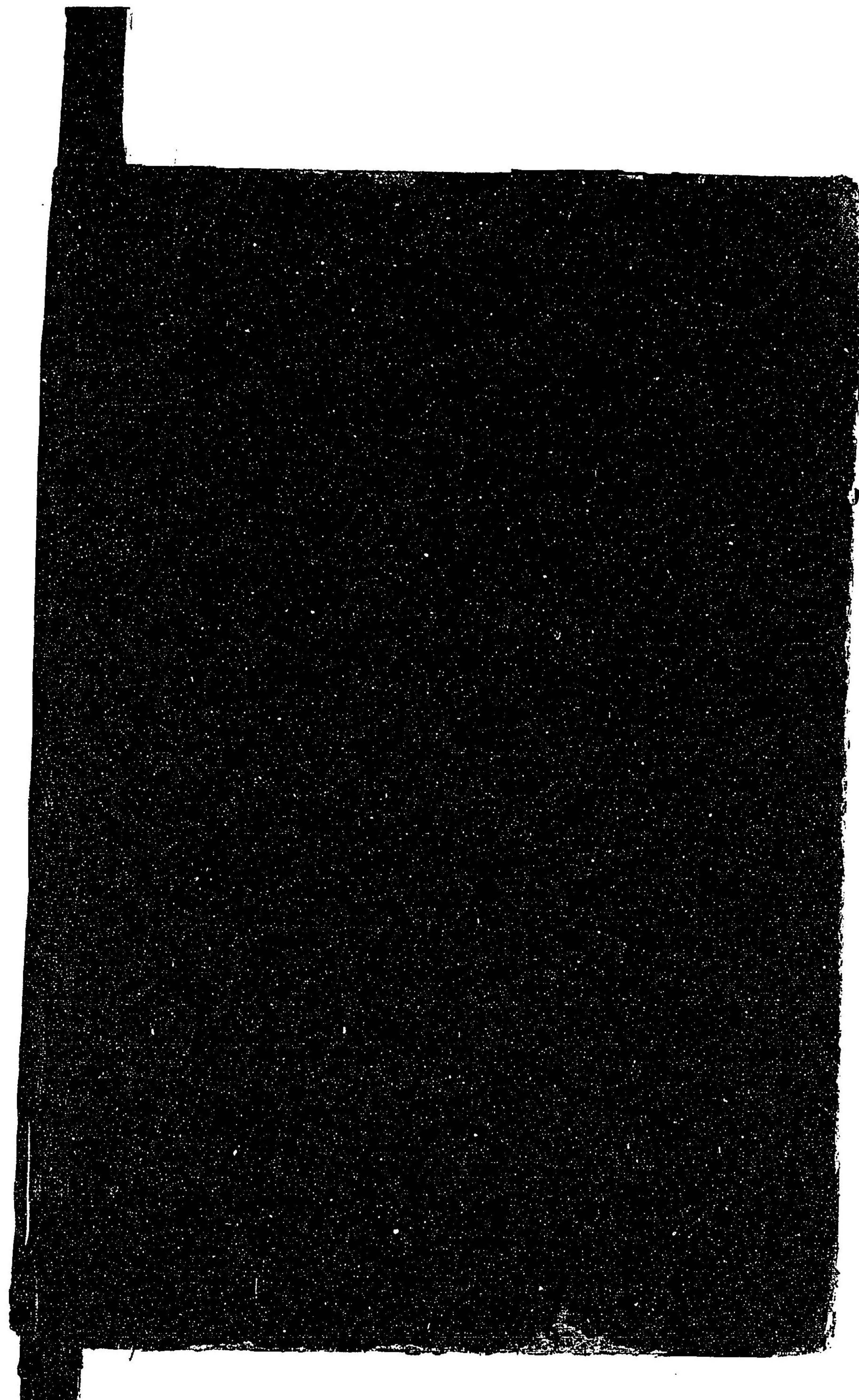
第壹 木村長門守
第貳 刃の
第參 山中鹿之助

以下毎月數冊と發刊し全部無慮數十冊
を發行すべし時代物と世話物の大叢書也



78
100

179 4



78
100

006688-000-6

78-100

木村長門守

渡辺 霞亭(緑園) / 著

M41

ACK-0409



